

キヤサリン・アレン・スミス著

井本响二・山下陽子訳

## 『中世の戦争と修道院文化の形成』

(叢書・ウニベルシタス 1009)

法政大学出版社 二〇一四・四刊

四六 四〇六頁 五〇〇〇円

盛期中世のヨーロッパで爆発的な増加を見た修道院。禁域としてのイメージもあり、一九世紀以来その研究は非常に閉鎖的な問題関心から行われてきたが、この二五年限で修道制・修道院と封建社会、そのうち特に「戦う人」で構成される貴族社会との密接な関係が明らかにされてきた。本書はそれをさらに推し進めたもので、著者スミスは修道院文化の形成、修道士の自己イメージや種々のメタファーがいかに戦争や戦士にまつわる諸概念に着想を得ていたかを論じている。これまでも「修道士＝キリストの戦士(miles Christi)」という図式が強調されてきたが、これを含めより包括的な議論を試みているのが本書の特徴である。以下、章ごとに内容を紹介してゆく。

第一章は古代から行われてきた聖書解釈を分析する。アウグスティヌスらによる旧約聖書の予表的解釈を取り上げ、そこで活写される戦争が新約聖書における精神的な戦いと重ね合わされていたとする。こうした聖書解釈は修道院典礼に影響を与え、その

ため修道院典礼は戦争にまつわる語彙に満ちあふれ、中世の修道士は自らをダビデやパウロの後継者と見なした。

続く第二章では、「祈る人」と「戦う人」の関係を考察する。両者は相互に軋轢を示しつつ文化的な影響関係にあった。著者は特に一一世紀を境にして修道院への新人入会の形が変化したことに注目し、成人後改心した戦士が、同様の経歴を持つ修道士らによって受け入れられていったことの意味を強調する。

第三章では、「キリストの戦士(miles Christi)」概念の歴史が古代末期まで遡って考察される。ここでは、殉教者や砂漠の隠修士に始まり、修道士を経て盛期中世に誕生した騎士修道士や十字軍士までが同一の系譜上に位置付けられる。

最後の二章で、修道院で著述された書簡、説教、伝記を題材に、盛期中世の修道院文化と戦争・戦士の関係が本格的に考察される。第四章はこれらの史料をもとに、教父時代やカロリング時代に比べ、当時の修道院生活がますます精神的な戦争として観念されるようになり、より一層多彩な軍事的寓意で表現されていたことを明らかにする。

そして最後の第五章で、著者はこれまでの議論を踏まえつつ大胆な解釈を展開する。すなわち、戦士こそが修道士の精神的な模範としての役割を果たしていたとし、伝統的なヒエラルヒーを逆転させた理解を提示するのである。ここでは史料上突出した存在感を示す戦士の類型がいくつか例示され、古代後期の「戦士聖人」、悔悛して修道誓願を行う戦士、そして鎧をまとい肉体を不自由にして隠修士として苦行に従事するIoricatus等が聖人伝をもとに

考察される。

本書は教父時代の文献も含め数多くの史料を駆使し、重厚な叙述で修道院文化と世俗社会の関係史に大きく貢献しており、幅広い関心に応える一冊である。本書の翻訳・刊行を喜ぶと共に、訳者の労を多としたい。ただ訳文がややぎこちなく、所々訳語の不適切な選択や不統一が見られるのが残念である。例えば *ordo* (order) を「教団」とするのは完全に誤訳で、文脈に応じて「身分」と「修道会」に訳し分けるべきであった。こうしたことで本書の価値が減じるわけではないが、読者の正確な理解を妨げかねず、訳業のどこかの段階で専門家の目を通すべきであった。

(大貫俊夫)